

高槻 まちかど遺産 H25-5



東岡宿の南門跡

富田北東部は、戦国から江戸時代にかけて「東岡宿」という町場で、周囲は土塁と堀・筒井池が廻り、北・南・西の主要な出入口に門が構えられました。当時、南門のすぐ北側は紅屋屋敷、西側は広大な筒井池が広がっていました。門から南の道は、筒井池の堤の上を通り、その先は、富田の中心街「市場通り」に通じていました。東岡宿と市場通りの間に位置する南門は、多くの人びとが行き交ったことでしょう。



「富田東岡宿絵図」(部分) 江戸時代 個人蔵

高槻市

更新 令和4年3月



東岡宿の南門跡

富田北東部は、戦国から江戸時代にかえて「東岡宿（ひがしおかしゆく）」という町場で、周囲は土塁と堀・筒井池が廻り、北・南・西の主要な出入り口に門を構えていました。

当時、南門のすぐ北側は紅屋屋敷、西側は広大な筒井池が広がっていました。門から南の道は、筒井池の堤の上を通り、その先は、富田の中心街「市場通り」に通じていました。東岡宿と市場通りの間に位置する南門は、多くの人びとが行き交ったことでしょう。

高槻市

更新 令和4年3月

※ 東岡宿は、尼崎や大阪への「高槻街道」や箕面に向かう道祖本（さいのもと）街道が通り交通の要衝の宿場町でした。

信長、秀吉の時代には「富田東岡宿」として楽市・楽座と公事免許が補償され、寺内町、宿場町、市場町の機能を合わせ持つ町として発展しました。

しかし江戸時代「西国街道」が整備されると、次第に近くの「芥川宿」に客を奪われ、次第に衰えて行ったようです。

土塁や石垣などで守られていた東岡宿は、世の中が平穏になり、江戸時代には町家が外に発展して行きました。

※ 東岡の南半分は、新家町と呼ばれ多くの職人や商人が住み、南岡が農民の地区であったのとは対照です。その中で清水家が紅屋と呼ばれ、その一族が多く住んでいました。